

莊園領主の館

「莊園」という言葉をご存じでしょうか。『広辞苑』によると「…貴族・社寺の私的な領有地」とあります。飛鳥～平安時代の日本国は、民衆と土地を政府が直接支配しており、その土地（公領）で収穫した米などの産物の一部を税として納めていました。日本の各国には中央政府から任命された貴族が国司として派遣され、地方に住まう豪族が郡司としてその任務を補佐していました。

ところが、平安時代の中期になると税負担の増大から民衆が公領を離れ（逃散^{ちようさん}）るようになります。そして彼らは、山林・原野に設けられた貴族や社寺の私有地（莊園）の新田開発に参加することとなり、公領が荒廃していきました。地方豪族である郡司も莊園の増大によって勢力を弱め、没落していきます。

貴族が、国司としてその任命された国に赴任していくことを受領^{ずりよう}といいますが、受領は赴任した国で私営田経営をおこない、その地方

の有力者（莊園領主）へと成長していきます。後に、この莊園領主が自衛のために武器を持ったのが武士で、彼らは連携を深めて武士団を形成していきます。その代表が源氏と平氏の



大内城跡想像復原図（早川和子作画）

武士団です。

平安時代末期、権勢を誇った平氏政権の中で、清盛に次いで第2位の地位にあったのが平頼盛です。全盛を誇った平氏は、壇ノ浦の戦い（1185年）によって滅亡しますが、ひとり頼盛だけは八条院の庇護を受けて助かります。



屋敷地内につくられた領主の墓（大内城跡）

頼盛は丹波国^{むとべ}六人部荘（福知山市六人部）の領家（荘園領主）でした。本家は八条院（鳥羽天皇の第3皇子、1137～1211年）で、全国に莫大な荘園を持っていました。

鎌倉時代初期に下六人部を中心に六人部新荘ができ、「平高盛」という人物が現地の荘官として勤めていました。「盛」という名を持つことから、あるいは頼盛の子であった可能性があります。少なくとも、平氏一族であることは間違いなく、鎌倉時代になっても、頼盛一族の勢力が根づいていたことを窺わせます。

この六人部荘は福知山盆地の南東部、由良川に注ぐ土師川と竹田川の合流地点にあり、この合流地点をのぞむ高台に、平安時代末期から鎌倉時代の荘園領主の館と推測される大内城跡^{おおうちじょう}があります。大内城跡は、土塁で囲まれた一辺80～100mの方形の館内に、西面する主殿を中心に、北側に倉・台所など、南側に井戸と馬小屋などの施設が配置されていました。西側には建物はなく、広場でした。館の東北隅には、館の創設者と歴代の館主の墓が造られています。

屋敷内では多数の中国製陶磁器片が出土したことから、遠く中国からもたらされた数多くの貴重品を使用していたことがわかりました。
(伊野近富)